

歴史に学ぶ

児玉 寛嗣

韓国は竹島を不法占拠、中国は尖閣諸島を自国の領土と主張して久しい。最近是中国とロシアの艦隊が日本国内の海峡を通過。これらに日本は強く抗議すると表明しているが、いたずらに刺激したくないと静観状態だ。その裏には周辺諸国を侵略し、太平洋戦争に突き進んでいき壊滅的な敗戦を喫したという過去のトラウマがあるのだろうか。日本が動く周辺諸国が警戒感を強めて却って対立が激しくなると自重しているとも見える。しかし、日本は何を仕掛けても容認する国と他国は受け取るのではないか。

歴史を振り返る。ミュンヘン会談、これは一九三七年にヒットラーと英仏伊の首脳が行った会談である。当時、ドイツはチェコスロバキアの一部であったズデーテン地方を自国に帰属させることを主張していた。この地方にはドイツ系住民が多く、彼らが虐げられているからだという理由であった。会談の結果、「ドイツがこれ以上、領土拡張を行わないこと」を条件に主張を認めた。イギリスのチェンバレン首相は帰国時に降り立った空港で「これでヨーロッパに平和が戻ってくる」と声高らかにスピーチした。第一次世界大戦の終結から二十年も経っておらず、国民には「平和を望み、戦争を回避したい。ドイツを刺激しないほうがよい」との思いが強かった。一方、会談結果を痛烈に批判し「ドイツに屈するな、軍備を増強して、抑止力を強めるべし」と訴えた男がいた。その男は後に首相となりイギリスを勝利に導いたチャーチルである。彼の予測通り、ドイツは会談相手の国々を臆病者と見下し、次々と領土を拡大して開戦に突き進んでいった。後世の歴史では「この会談での宥和政策が大戦のきっかけとなった」とされている。

翻って、今日の日本を取り巻く状況を見れば、この歴史に学ぶべきものがあると考ええる。アメリカ頼み一辺倒の平和ボケから目覚める時ではないか。極論と取られるかもしれないが、国防費を増やすことだけでもメッセージにはなる。